

Title	心理的支えに関する研究(2) : 青年期における恋愛体験との関連
Author(s)	串崎, 真志
Citation	大阪大学教育学年報. 4 P.145-P.157
Issue Date	1999-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/4310
DOI	10.18910/4310
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

心理的支えに関する研究 (2)

—青年期における恋愛体験との関連—

申 崎 真 志

【要旨】

本研究では、専門学校生145名を対象に質問紙調査を実施し、青年期における恋愛体験と心理的支えとの関連を検討した。まず、従来の心理的支え尺度を改訂し、15項目からなる短縮版Ⅱを作成した。次に、回答者を、彼らの恋愛体験にしたがって恋愛群、失恋群、未経験群の三群に分け、心理的支え尺度得点について分散分析を行った。その結果、三群で有意な差はみられず、恋愛体験は心理的支えに影響を与えていないことが明らかになった。しかし、より詳細にみると、相関係数の結果から、失恋時の感情体験が大きいほど、宗教性による支えを感じていることが示唆された。深層心理学的には、異性との関係は、自らの「内なる異性」にふれる体験でもある。失恋時の感情は、自我の力ではコントロールしがたいものを含んでいる。われわれは、このような体験を通して宗教性にふれていくのではないだろうか。

1. はじめに

筆者は、これまで、「『私』という存在を支えるもの」を心理的支え (psychological support) として概念化し、その測定尺度の作成や心理療法のプロセスにおける意味について考察してきた (申崎, 1997b, 1998b)。その結果、心理的に支えられているという感じは、対人的な次元から宗教性の次元まで、多層的な構造をもつことが示唆された。

ところで、このような多層的な次元にわたる体験として恋愛があげられるだろう。恋愛は、異性との現実的な関係でもあるし、後述するように、深層心理学的には自らの「内なる異性」にふれる体験でもある。そこで、本研究では、青年期における恋愛体験と心理的支えとの関連について検討することを目的とする。

「青年にとって、『恋愛』は、もっとも強い関心事であり、また、それだけに、青年の主要な悩みごとの一つでもある」(飛田, 1992, 9頁)という。しかし、恋愛が、これまで心理学の研究対象として実証的に取りあげられたことは少なく (松井, 1998b, 6頁)、最近になってようやく、社会心理学を中心として研究が始まったところといえる (例えば、大坊・奥田, 1996; 松井, 1993; 松井, 1998aなどを参照)。

ところで、青年期における恋愛体験は、彼らの内面的な成熟にどのような影響を及ぼすのであろうか。残念ながら、このテーマについて実証的に検討した研究は少ない (例えば、飛田, 1989, 1991; 神薊, 1998; 楠見, 1987など)。

例えば、飛田 (1991) は、現在「恋人」が存在する群 (恋愛群)、過去には「恋人」と呼べる人がいたが、現在はいない群 (失恋群)、そして、現在・過去を通して「恋人」は存在しない群 (未経験群) の三群を比較して、自尊心が、恋愛群、失恋群、未経験群の順に高い

ことを見いだしている。

また、神薊 (1998) は、いま現在進行中の恋愛関係の有無と、過去に一度でも恋愛関係を持ったことがあるか否かによって、回答者を次の四群に分けた調査を行なっている。すなわち、現在恋愛関係にあり、過去にも恋愛関係を持っていた群 (関係あり・経験あり群)、現在は恋愛関係にあるが過去には経験のない群 (関係あり・経験なし群)、現在は恋愛関係にないが過去には経験したことがある群 (関係なし・経験あり群)、そのどちらもなし群 (関係なし・経験なし群) である。その結果、自尊心・充実感・抑うつ得点は、関係あり・経験あり群が、関係なし・経験なし群よりも高い (抑うつ得点は低い) ことが明らかになった。また、男性においては、関係なし・経験あり群の得点が極端に低く (抑うつ得点は高く) なっていることも見いだされた。

さらに神薊 (1998) では、恋愛体験と男性性・女性性 (Bem Sex Role Inventoryで測定) との関連も検討し、その結果、女性における男性性は、関係あり・経験あり群が、なし・なし群よりも高く、また、男性の女性性も、なし・なし群が他の3群よりもかなり低くなっていることを見いだした。この結果は、「恋愛関係の構築により異性を自己の中に取り入れている」(神薊, 1998, 221頁) ことを示唆しており、「男性と女性について考えるとき、それぞれが内なる異性をもっており、男女の関係が、内なる異性もいれて男女四人の関係になる」(河合, 1991, 132頁) という深層心理学的な視点を実証的に裏づけるものとして興味深い。

また、楠見 (1987) は、交際目的によって、回答者を、刹那的快樂群、道具的功利群、結婚志向群、単純好意群、片思い群に分け、恋愛感情得点 (Rubin, 1973の Loving Scaleで測定) に差がみられるかどうかを検討している。その結果、片思い群の恋愛感情得点は、結婚志向群に次ぐ高い値を示すことを見いだした。このことは、片思いの体験が、「相手からの好意の返報性がない関係とはいえ、前向きの姿勢で純粋に相手に好意を持って」いて、「強い恋愛感情を感じる」(楠見, 1987, 68頁) ものであることを示唆している。片思いも心理的には重要な体験であるといえるだろう。

宮下 (1998, 72頁) によれば、「多くの恋愛をし失恋をしていくことは、青年が自己のアイデンティティを確立していくうえで、欠くことができないこと」であるという。恋愛体験は、青年の内面的な成熟に重要な役割を果たしており、それは、おそらく、心理的支えにも影響を与えるものと予測される。そこで、本研究では、飛田 (1989, 1991) にならって、回答者の恋愛体験を三群に分け、心理的支えとの関連を検討することを目的とする。

2. 方法

対象者 医療系専門学校生89名 (男性45名, 女性44名)、福祉系専門学校生56名 (男性38名, 女性18名) の合計145名 (男性83名, 女性62名)。年齢は、年齢範囲18~27歳、平均年齢20.05歳、標準偏差は2.22であった。

調査時期 1998年4月。質問紙は、講義時間を利用して集団で実施した。

質問紙の構成 質問紙は以下の尺度で構成された。

①心理的支え尺度(短縮版Ⅱ)

串崎(1998a)で作成した四因子19項目からなる心理的支え尺度(短縮版)から、「恋人による支え」因子を除いた15項目をもって心理的支え尺度(短縮版Ⅱ)を作成した。各項目の回答は、「1=ぜんぜんそう思わない」から「5=まったくそう思う」の5件法。逆転項目はなかった。

②恋愛体験に関する尺度

飛田(1989, 1991)にならい、回答者は恋愛体験によって次の三群に分けられ、それぞれ該当する尺度に回答した。すなわち、①現在「恋人」がいる群(恋愛群)、②以前はいたが、現在はいない群(失恋群)、③現在・過去を通していない(未経験群)である。なお、「恋人」は「交際している特定の異性」として定義した。

恋愛群は、交際期間の他、

「相手との人間関係にどれくらい満足しているか」という満足感

(「1=ぜんぜん満足していない」～「6=かなり満足している」)、

「相手と意見が合わなかったり、けんかをしたりする」という葛藤の頻度

(「1=ぜんぜんない」～「6=かなりある」)、

「相手と別れようと思うことがある」という関係解消感情

(「1=ぜんぜんない」～「6=かなりある」)、

「相手とは、これからもうまくやっていけそうだ」という関係の持続に対する展望

(「1=ぜんぜんそう思わない」～「6=とてもそう思う」)

について評定した。

失恋群は、「もっとも最近に交際した相手」について、交際期間、失恋後の期間の他、失恋直後の心理的反応および現在のそれについて、「1=ぜんぜんそう思わなかった(思わない)」～「6=とてもそう思った(そう思う)」の6段階で評定した。これは、鳴島(1993)をもとに飛田(1998)が紹介しているもので、

「相手がいなくなって悲しかった」

「その人とは友だちでいようと思った」

「今の自分では仕方ないと思った」

「強く反省した」

「相手をなかなか忘れられなかった」

「胸が締めつけられるようだった」

「別れた後も相手を愛していた」

「相手に償いたいという気持ちが起こった」

の8項目である。

未経験群については、自分に恋人がいない理由について、「1=ぜんぜんそう思わない」～「6=とてもそう思う」の6段階で評定した。これは、飛田(1990)の分類から筆者が任意に選んで作成したもので、

「消極的な性格だから」

- 「恋人が欲しいとは思わないから」
- 「理想が高すぎるから」
- 「自分に自信がないから」
- 「自分の性格が望ましくないから」
- 「自分の容姿がよくないから」
- 「異性と出会う機会が少なかったから」
- 「今まで好きな人がいなかったから」
- 「好きな人はいたが、片思いで終わったから」
- 「異性とコミュニケーションをするのが苦手だから」

の10項目である。

なお、失恋群と未経験群については、現在、片思いの相手がいるかどうかについても回答した。

3. 結果と考察

(1) 心理的支え尺度（短縮版Ⅱ）の因子分析

「ぜんぜんそう思わない」から「まったくそう思う」をそれぞれ1～5点として得点化し、因子分析（主成分分解，Varimax 回転）を行なった。その結果、五因子15項目をもって心理的支え尺度の短縮版Ⅱを構成した（表1）。項目の内容から、第Ⅰ因子は「友人による支え」、第Ⅱ因子は「宗教性による支え」、第Ⅲ因子は「現在の立場による支え」、第Ⅳ因子は「建設的思考による支え」、第Ⅴ因子は「父母による支え」として、それぞれ解釈された。これは、申崎（1996, 1997a）で抽出された因子と同様である。そこで、申崎（1996, 1997a）にならって、「友人による支え」因子と「父母による支え」因子の得点を合計したものを対人的支え（interpersonal support）、「宗教性による支え」因子、「現在の立場による支え」因子、「建設的思考による支え」因子の得点を合計したものを内面的支え（intrapersonal support）として分析を行なった。

表1 心理的支え尺度(短縮版II)の因子分析の結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通
I. 友人による支え						
・私の友人は、良いところも悪いところも含めて、私のことを認めてくれる。	.843	.037	.009	.189	-.053	.751
・私の友人は、ふだんから私の気持ちや感情をよく理解してくれる。	.836	-.006	.103	.042	-.048	.713
・私の友人は、私が落ち込んでいるときに、慰めたり励ましたりしてくれる。	.827	-.145	.126	.114	.191	.771
II. 宗教性による支え						
・私は、心のよりどころや生きがいとなっているような宗教(あるいは自分なりの信念)をもっている。	.029	.876	-.000	.181	-.098	.810
・私は、私の人生観、世界観、価値観の基準となっているような宗教(あるいは自分なりの信念)をもっている。	-.101	.867	.103	.110	-.131	.801
・私にとって、宗教は、心の安らぎや幸せを感じさせるものである。	-.019	.702	-.043	.058	.163	.525
III. 現在の立場による支え						
・現在の自分の地位(立場)を考えると、「自分もよくやってきたな」と思う。	.025	-.074	.901	.079	-.054	.827
・自分の生きてきた人生をふりかえってみると、「これまでよくやってきた」と思う。	.035	-.026	.833	.182	.096	.738
・私は、自分が現在の地位(立場)にいることを誇りに思う。	.210	.174	.681	.107	.183	.583
IV. 建設的思考による支え						
・自信をなくしているときでも、「頑張れば道は開ける」と思って、気を取り直すことができる。	.026	.148	.102	.828	.086	.726
・人生には苦しいときもあるが、基本的に自分の将来はチャンスと可能性に満ちていると思うと、気が楽になる。	.102	.111	.069	.818	.079	.703
・苦しいときでも、自分の可能性を信じて頑張ることができる。	.283	.097	.245	.684	.041	.618
V. 父母による支え						
・私の母親は、必要なときにお金や物を援助してくれたり、必要に応じて適切なアドバイスをくれたりする。	-.008	-.020	-.025	.099	.805	.659
・私の母親は、良いところも悪いところも含めて、私のことを認めてくれる。	-.048	.055	.127	.076	.757	.601
・私の父親は、必要なときにお金や物を援助してくれたり、必要に応じて適切なアドバイスをくれたりする。	.106	-.059	.072	.008	.724	.544
固有値	3.478	2.333	1.854	1.591	1.114	
寄与率(%)	23.2	15.6	12.4	10.6	7.4	

注 因子分析(主成分分解、Varimax 回転)を行なった結果。

(2) 心理的支え尺度の平均値と標準偏差

心理的支え尺度の平均値と標準偏差を表2に示した。

性差を検討するため、t-testを行なった。その結果、「友人による支え」因子、「現在の立場

による支え」因子および「対人的支え」に有意な差がみられた（それぞれ、 $t(143)=-3.09$ $p<.01$, $t(143)=-2.03$ $p<.05$, $t(143)=-2.75$ $p<.01$ ）。すなわち、女性は、男性に比べて、友人や現在の立場によって心理的に支えられていることが明らかになった。これは、申崎（1996, 1997a）の結果と同じである。また、尺度総得点では有意な傾向差も認められた（ $t(143)=-1.96$ $p=.05$ ）。また、信頼性の指標として、Cronbachの α 係数を求め、表2に示した。尺度総得点において $\alpha=.73$ 、各因子においても $\alpha=.66\sim.81$ であり、やや低めではあるが内的整合性は妥当と考えられた。以上のことから、短縮版IIの妥当性は確認されたといえるだろう。

表2 心理的支え尺度平均値と標準偏差

尺度	性別		
	全体 (N=145)	男性 (N=83)	女性 (N=62)
I 友人 (3項目; $\alpha=.81$)	11.72 (2.21)	11.24 (2.34)	12.35** (1.86)
II 宗教性 (3項目; $\alpha=.78$)	6.98 (3.31)	7.24 (3.44)	6.63 (3.12)
III 立場 (3項目; $\alpha=.77$)	9.01 (2.86)	8.60 (2.97)	9.56* (2.63)
IV 建設的思考 (3項目; $\alpha=.75$)	11.15 (2.38)	10.93 (2.50)	11.45 (2.21)
V 父母 (3項目; $\alpha=.66$)	11.30 (2.44)	11.11 (2.37)	11.55 (2.52)
対人的支え (6項目; $\alpha=.63$)	23.01 (3.43)	22.35 (3.27)	23.90** (3.45)
内面的支え (9項目; $\alpha=.74$)	27.14 (5.91)	26.77 (6.44)	27.65 (5.12)
尺度総得点 (15項目; $\alpha=.73$)	50.16 (7.43)	49.12 (7.55)	51.55+ (7.10)

注1. かっこ内の数値は標準偏差を示す。

注2. α はCronbachの α 係数を示す。

注3. 有意水準 (t-test) : + $p<.10$; * $p<.05$
** $p<.01$

(3) 恋愛体験別にみた心理的支え尺度得点の差

恋愛群は59名（男性34名、女性25名）、失恋群は55名（男性36名、女性19名）、未経験群は31名（男性13名、女性18名）であり、それぞれ全体の40.7%、37.9%、21.4%を占めていた。大学生を対象にした飛田（1989）の研究では、それぞれ35.1%、29.7%、35.1%、同じく飛田（1991）の結果では、44.4%、26.5%、29.1%であり、これらと比べると、失恋群がやや多く、未経験群がやや少ないといえる。失恋群と未経験群のうち、現在、片思いの相手がいると回答したのは24名（男性9名、女性15名）、すなわち失恋群で16名（男性7名、女性9名）、未経験群で8名（男性2名、女性6名）であった。

恋愛群の交際期間の平均は、男性は16.44 か月（標準偏差16.95）、女性は18.72 か月（標準偏差16.39）であった。有意な性差はみられなかった（ $t(57)=-0.52$ n.s.）。

失恋群の交際期間の平均は、男性は7.56 か月（標準偏差11.76）、女性は6.05 か月（標準偏差7.68）であった。比較的短期間の交際が多いといえよう。有意な性差はみられなかった（ $t(53)=0.50$ n.s.）。失恋後の期間の平均は、男性は14.58 か月（標準偏差16.72）、女性は12.58

か月(標準偏差13.98)であった。有意な性差はみられなかった ($t(53)=0.50$ n.s.)。

さて、本研究の主要な問題である、恋愛体験によって心理的支え尺度の得点が異なるかどうかを検討するため、男女別に一要因の分散分析(ONEWAY)を行なった(表3)。その結果、5%水準以下の有意な差は見いだされず、恋愛体験は心理的支えには影響を与えていないことが明らかになった。

ただし、男性サンプルの「友人による支え」因子においては、有意な傾向差がみられた ($F(2,80)=2.71$ $p=.07$)。多重比較(LSD法)を行なったところ、失恋群($m=11.78$)と未経験群($m=10.08$)とのあいだに有意差($p<.05$)がみられた。友人からの支えが、失恋群で最も高い理由としては、恋人を失った分、友人とのつきあいが増加したことが考えられる。「失恋からの回復過程には、個人的な特徴だけでなく、家族や友人といった社会的なネットワークからのサポートも重要な役割を果たしている」(飛田, 1998, 128頁)という。おそらく、男性にとって、友人は、失恋後に、その痛手から立ち直るための支えとして機能しているのではないだろうか。

また、現在、片思いの相手がいる場合(片思いあり群)といない場合(片思いなし群)で、心理的支え尺度得点に差があるかどうかを検討するため、失恋群と未経験群のそれぞれについて、 t -testを行なった。その結果、失恋群では「宗教性」因子で、未経験群では「現在の立場」因子で有意な差が見いだされた(それぞれ、 $t(53)=-2.11$ $p<.05$, $t(29)=2.08$ $p<.05$)。すなわち、失恋群では、片思いなし群($m=7.38$)が、あり群($m=5.31$)よりも宗教性得点が高いことが明らかになった。やや拡大解釈になるが、未だ失恋の喪の期間にある「なし群」のほうが、ふっ切れて新しい恋に気持ちが動いている「あり群」よりも、自己の内面に意識が向かいやすく、宗教性得点も高くなったと考えられる。

また、未経験群では、片思いあり群($m=11.13$)が、なし群($m=9.00$)よりも、現在の立場によって支えられていると感じていることが明らかになった。このことは、楠見(1987, 68頁)のいうように「前向きな姿勢で純粋に相手に好意を持って」いる状態が、心理的な安定や自己肯定感につながることを示唆しており、片思い体験の重要性を裏づけるものといえるだろう。

表3 心理的支え尺度平均値と標準偏差(恋愛体験別)

尺度	男性			女性			多重比較(LSD法)
	恋愛(N=34)	失恋(N=36)	未経験(N=13)	恋愛(N=25)	失恋(N=19)	未経験(N=18)	
I 友人	11.12 (2.13)	11.78 (2.15)	10.08+ (3.01)	12.44 (1.64)	12.26 (1.63)	12.33 (2.40)	失恋 > 未経験
II 宗教性	6.79 (3.36)	7.47 (3.52)	7.77 (3.54)	6.96 (3.37)	5.47 (2.84)	7.39 (2.85)	
III 立場	8.21 (3.32)	8.78 (2.92)	9.15 (2.08)	9.56 (3.00)	9.32 (1.70)	9.83 (2.98)	
IV 建設的思考	10.88 (2.54)	11.03 (2.49)	10.77 (2.59)	11.48 (2.38)	11.37 (1.89)	11.50 (2.38)	
V 父母	11.50 (2.26)	10.67 (2.31)	11.31 (2.81)	11.68 (2.17)	11.32 (3.18)	11.61 (2.30)	
对人的支え	22.62 (3.30)	22.44 (3.11)	21.38 (3.71)	24.12 (2.74)	22.58 (4.11)	23.94 (3.75)	
内面的支え	25.88 (6.15)	27.28 (6.88)	27.69 (6.14)	28.00 (5.70)	26.16 (3.35)	28.72 (5.71)	
尺度総得点	48.50 (7.90)	49.72 (7.87)	49.08 (5.96)	52.12 (7.38)	49.74 (6.02)	52.67 (7.74)	

注1. かっこ内の数値は標準偏差を示す。
 注2. α はCronbachの α 係数を示す。
 注3. 有意水準(ONEWAY) : + $p<.10$

(4) 恋愛体験と心理的支え尺度との相関

恋愛体験と心理的支えとの関連をもう少し詳しくみるため、恋愛体験に関する諸項目と心理的支え尺度との相関を Pearson の相関係数によって男女別に求め、表 4～表 8 に示した。

①恋愛時の感情と心理的支えの関連 (表 4)

男性サンプルでは、交際相手に対する満足感、葛藤の頻度、関係解消感情、関係持続の展望のいずれについても、心理的支えとのあいだに有意な相関は見いだされなかった。

女性サンプルでは、葛藤の頻度と「友人による支え」因子 ($r=-.42$ $p<.05$) および「対人的支え」($r=-.52$ $p<.01$) とのあいだに、有意な負の相関が見いだされた。すなわち、友人からの支えを得られているほど、恋人との葛藤も少ないのである。女性は、男性に比べて友人による支えを感じており (表 2)、信頼できる友人のネットワークによって支えられているところが大きい。彼女たちにとって、友人は恋愛関係の悩みの大切な相談相手となっていることがうかがわれる。

表 4 恋愛関係における感情体験と心理的支えとの相関

		平均値 (SD)	友人	宗教性	立場	思考	父母	対人	内面	総得点
満足感	男性	4.85(1.23)								
	女性	4.80(1.11)								
葛藤	男性	3.94(1.28)								
	女性	3.68(1.44)	-.42*					-.52**		
関係解消	男性	2.47(1.42)								
	女性	2.68(1.52)								
関係持続	男性	4.68(1.01)								
	女性	4.60(1.29)								

注1. 男性 N=34 ; 女性 N=25

注2. 感情体験の回答は 6 件法.

注3. 有意水準 : * $p<.05$; ** $p<.01$ 相関係数は有意なもののみ記した.

②失恋直後および現在の感情体験と心理的支えの関連 (表 5, 表 6)

「今も相手を愛している」という項目は、男女で有意な傾向差がみられ ($t(53) = 1.69$ $p=.097$)、男性 ($m=2.69$) は、女性 ($m=2.00$) に比べて、現在も相手に未練を感じている傾向が認められた (表 5, 表 6)。松井 (1993, 147頁) も、「恋を失うと、女性より男性の方が、失った恋に執着し、すがるような気持ちを持ち続けます」と述べている。このことは、失恋直後の感情体験の平均値を比べてみると、より明瞭である。男性で平均値が最も高い項目は、「今の自分では仕方ないと思った」($m=4.14$) であるが、女性の第一位は「その人とは友だちでいようと思った」($m=4.32$) である。男性がクヨクヨしているのに対し、女性はあっさりしているように見える。このような違いは、おそらく、「別れの主導権を握っているのは女性」(松井, 1993, 143 頁) が多いことに由来していると考えられる。

表 5 を見ると、失恋群の男性は、友人からの支えが多いほど、「相手に償いたいという気持ち」が少なく ($r=-.39$ $p<.05$; $r=-.47$ $r=.01$)、恋人に対する未練も少ないことが示された。男性は、失恋後に友人の力を借りて立ち直り、女性は、恋愛期間中に友人の知恵をして恋人との葛藤を解決しているということであろうか。

また、男女ともに、失恋時の感情体験が大きいほど宗教性による支えを感じていることが

明らかになった(表5, 表6)。特に、女性においては、やや強い相関($r=.49 \sim .66$)がみられた。ここで、恋愛と宗教性との関連について少し考えてみたい(ただし、本尺度の項目は、宗教性というよりは、宗教の有無を測定しているといったほうが適切かもしれない)。

ユング派分析家のジョンソン(Johnson, 1983 訳書 1989)は、「私たち西洋の文化においては、ロマンティック・ラブは今や宗教に代わるものとして、男性も女性もそのなかに意味を求め、超越を求め、完全と歓喜とを求めています」(Johnson, 1983 訳書 1989, 1頁)、「私たちが絶えることなくロマンティック・ラブのなかに求めているのは、人間的な愛、人間的な関係だけではありません。同時に私たちは、宗教的な経験、全体性のヴィジョンをも求めています」(同訳書 73-74頁)(傍点筆者)と述べ、恋愛体験と宗教性との関連を指摘している。

ジョンソンによると、「ロマンティック・ラブにおいては、男女はともに常に相手に自分の魂のイメージを投映して」(同訳書 88頁)いるのであるが、そもそも「人生の意味は究極的には己れ自身の魂に通じる孤独な小道のなかに見出されるものであり、いたずらに外界に求められるべきものではない」(同訳書 92頁)という。このように、ジョンソンは現代のロマンティック・ラブのありかたに警鐘を鳴らしているのであるが、その是非はともかくとして、恋愛が心理的に重要な体験であることは間違いなさであろう。

おそらく、恋愛には「自我の力ではコントロールできない力がそこにはたらく」(河合, 1991, 130頁)のであり、それは、自分のなかの「思いどおりにならないもの」「どうしようもないもの」「わけのわからないもの」「わりきれないもの」などを感じる体験といえる。思春期から青年期にかけては、身体的にも心理的にも大きな変革が行なわれる時期であるが、そういうときに異性との出会いが重要になるのも、「そこに魂の問題が入っている」(河合, 1993, 187頁)のだと考えてみると興味深い。このようなことから、「宗教性を失った現代人にとって、ロマンティック・ラブはむしろ内なる魂に注意を向け、内なる世界に目を開く残された唯一の窓ともなっている」(長田, 1989, 278頁)というのも、うなずける。失恋は、特に心理的に大きな体験であるが(飛田, 1996, 1997)、それは深層心理学の視点からも裏づけられる。

表5 失恋時の感情体験と心理的支えとの相関(男性)

	平均値(SD)	友人	宗教性	立場	思考	父母	対人	内面	総得点
失恋直後の感情体験									
悲しかった	4.03(1.68)								
友だちでいたい	3.58(1.70)								
仕方がない	4.14(1.50)		.39*						
反省した	3.25(1.54)		.54**						
忘れられない	3.56(1.80)								
胸が締めつけられる	3.47(1.75)								
愛していた	3.44(1.78)								
償いたい	3.08(1.63)	-.39*							-.42*
現在の感情									
悲しい	3.11(1.53)								
友だちでいたい	3.56(1.46)								
仕方がない	3.36(1.50)								
反省した	2.92(1.54)		.36*						
忘れられない	2.72(1.52)								
胸が締めつけられる	2.19(1.41)								
愛している(注3)	2.69(1.55)								
償いたい	2.58(1.57)	-.47**							-.36*

注1. N=36

注2. 感情体験の回答は6件法。

注3. 平均値に男女の傾向差あり。t(53) = 1.69 p = .097

注4. 有意水準: * p < .05; ** p < .01 相関係数は有意なもののみ記した。

表6 失恋時の感情体験と心理的支えとの相関 (女性)

失恋直後の感情体験			
悲しかった	3.37(1.70)	.66**	
友だちでいたい	4.32(1.49)		
仕方ない	3.47(1.72)		.46*
反省した	3.00(1.80)		
忘れられない	3.16(1.77)	.57*	
胸が締めつけられる	3.05(1.55)	.49*	
愛していた	2.74(1.52)	.56*	
償いたい	2.74(1.37)		-.46*
現在の感情			
悲しい	2.47(1.34)		
友だちでいたい	4.21(1.55)		.48*
仕方ない	2.84(1.50)		-.46*
反省した	2.79(1.55)		
忘れられない	2.37(1.21)		
胸が締めつけられる	2.05(0.97)		-.58**
愛している(注3)	2.00(1.25)		
償いたい	2.32(1.42)		

注1. N=19

注2. 感情体験の回答は6件法。

注3. 平均値に男女の傾向差あり。t(53)=1.69 p=.097

注4. 有意水準：* p<.05 ** p<.01 相関係数は有意なもののみ記した。

③ 未経験群における、恋人がいない理由づけと心理的支えとの関連 (表7, 表8)

表7を見ると、未経験群の男性は、「コミュニケーションが苦手」と感じているほど、友人からの支えが少ないことが見いだされた。堀毛(1998, 111頁)によると、「恋人の有無により、記号化や解釈など、対人関係の基本となるコミュニケーション・スキルにも違いがある」という。未経験群の男性にとっては、ソーシャル・スキルの欠如が恋人づくりのハンディキャップになっている可能性がある。

また、「消極的な性格だから」という項目は、男女で有意な差がみられた(t(29)=2.18 p<.05)。男性(m=4.46)は、女性(m=3.28)に比べて、恋人がいない理由を自分の消極的な性格に帰属させていることが明らかになった。

表7 恋人がいない理由づけと心理的支えとの相関 (男性)

	平均値 (SD)	友人	宗教性	立場	思考	父母	対人	内面	総得点
消極的な性格だから(注3)	4.46(1.13)								
恋人が欲しいと思わない	2.62(1.66)								
理想が高すぎる	3.00(1.16)								
自分に自信がない	4.00(1.29)								
性格が望ましくない	3.23(1.01)								
容姿がよくない	3.38(0.96)								
異性と出会う機会がない	3.23(1.30)								
好きな人がいなかった	2.46(1.71)								
片思いで終わった	4.38(1.26)								
コミュニケーションが下手	4.15(1.21)								-.60*

注1. N=13

注2. 理由づけの回答は6件法。

注3. 平均値に有意な男女差あり。t(29)=2.18 p<.05

注4. 有意水準：* p<.05 相関係数は有意なもののみ記した。

表8 恋人がいない理由づけと心理的支えとの相関(女性)

	平均値(SD)	友人	宗教性	立場	思考	父母	対人	内面	総得点
消極的な性格だから(注3)	3.28(1.71)								
恋人が欲しいと思わない	2.61(1.46)	-0.51*							
理想が高すぎる	2.83(1.30)	-0.53*					-0.47*		
自分に自信がない	4.33(1.46)								
性格が望ましくない	3.33(1.19)				-0.60**			-0.51*	-0.52*
容姿がよくない	4.06(1.35)								
異性と出会う機会がない	3.28(1.45)								
好きな人がいなかった	2.28(1.01)				-0.51*				
片思いで終わった	4.83(1.10)								
コミュニケーションが下手	3.78(1.48)								

注1. N=18

注2. 理由づけの回答は6件法.

注3. 平均値に有意な男女差あり, $t(29)=2.18$ $p<.05$

注4. 有意水準: * $p<.05$; ** $p<.01$ 相関係数は有意なもののみ記した.

4. おわりに

本研究では、青年期における恋愛体験と心理的支えとの関連について考察した。内面的な成熟という点からは、恋愛関係にあるか否かという外的な枠組みよりも、恋愛に関してどのような感情体験をしたかという内面的な体験のほうが重要であるといえる。また、恋愛体験と宗教性との関連も示唆された。今後は、深層心理学の視点も含めて、広く(深く)男性と女性(男性性と女性性)の関わりについて考えていくことが重要であろう。

引用文献

- 大坊郁夫・奥田秀宇(編) 1996 『親密な対人関係の科学(対人行動学研究シリーズ3)』誠信書房.
- 飛田 操 1989 「親密な対人関係の崩壊過程に関する研究」『福島大学教育学部論集(教育心理部門)』46, 47-55.
- 飛田 操 1990 「親密な対人関係の形成要因に対する帰属過程について」『福島大学教育学部論集(教育心理部門)』47, 37-47.
- 飛田 操 1991 「青年期の恋愛行動の進展について」『福島大学教育学部論集(教育心理部門)』50, 43-53.
- 飛田 操 1992 「恋をする」松井 豊(編)『対人心理学の最前線』サイエンス社, 9-21頁
- 飛田 操 1996 「対人関係の崩壊と葛藤」大坊郁夫・奥田秀宇(編)『親密な対人関係の科学(対人行動学研究シリーズ3)』誠信書房, 149-179頁.
- 飛田 操 1997 「失恋の心理」松井 豊(編)『悲嘆の心理』サイエンス社, 205-218頁.
- 飛田 操 1998 「愛の崩壊」松井 豊(編)『恋愛の心理—データは恋愛をどこまで解明したか—(現代のエスプリ 368)』至文堂, 122-130頁.
- 堀毛一也 1998 「恋愛のスキル」松井 豊(編)『恋愛の心理—データは恋愛をどこまで解明したか—(現代のエスプリ 368)』至文堂, 102-112頁.
- Johnson, R.A. 1983 *We: Understanding the Psychology of Romantic Love*, Harper & Row
- 長田光展(訳) 1989 『現代人と愛—ユング心理学からみた「トリスタンとイゾルデ」物語』新水社.
- 神薗紀幸 1998 「恋愛によって人は成長できるか—恋愛中の精神的健康と自己評価の様相—」松井 豊(編)『恋愛の心理—データは恋愛をどこまで解明したか—(現代のエスプリ 368)』至文堂,

215-224 頁.

- 河合隼雄 1991 『とりかへばや、男と女』新潮社.
- 河合隼雄 1993 『物語と人間の科学』岩波書店.
- 申崎真志 1996 「心理的支え尺度の作成」『日本心理学会第60回大会発表論文集』109頁.
- 申崎真志 1997a 「心理的支え尺度の作成(2)」『日本心理学会第61回大会発表論文集』31頁.
- 申崎真志 1997b 「こころの支えとはなにか—心理的支え試論—」『大阪大学教育学年報』2, 197-207.
- 申崎真志 1998a 「心理的支えに関する研究—ソーシャル・サポート志向性、孤独感、個人志向性・社会志向性との関連—」『大阪大学教育学年報』3, 43-52.
- 申崎真志 1998b 「心理的支え尺度の作成—大学生版の検討—」『心理臨床学研究』16(2), 186-192.
- 楠見幸子 1987 「女子短期大学生の恋愛感情体験に関する研究—交際目的による相違について—」『九州大学教育学部紀要(教育心理学部門)』32, 65-70.
- 松井 豊 1993 『恋ごろの科学(セレクション社会心理学12)』サイエンス社.
- 松井 豊(編) 1998a 『恋愛の心理—データは恋愛をどこまで解明したか—(現代のエスプリ 368)』至文堂.
- 松井 豊 1998b 「恋愛に関する実証的研究の動き」松井 豊(編)『恋愛の心理—データは恋愛をどこまで解明したか—(現代のエスプリ 368)』至文堂, 5-19 頁.
- 宮下一博 1998 「青年にとっての失恋の意味」松井 豊(編)『恋愛の心理—データは恋愛をどこまで解明したか—(現代のエスプリ 368)』至文堂, 63-72 頁.
- 鳴島 信 1993 「大学生男女の恋愛行動と失恋行動」平成5年度東京大学文学部卒業論文(未公刊).
- 長田光展 1989 「あとがき」Johnson, R.A. 1983 We: Understanding the Psychology of Romantic Love, Harper & Row. 長田光展(訳)『現代人と愛—ユング心理学からみた『トリスタンとイゾルデ』物語』新水社, 274-278 頁.
- Rubin, Z. 1973 Liking and Loving: An Introduction to Social Psychology, New York: Holt, Rinehart and Winston.

A Study of Psychological Support (2) : In Relation to Romantic Love Experiences in Adolescence

Masashi KUSHIZAKI

In this study the relationship between psychological support and romantic love experiences in adolescence was tested by administering a questionnaire to 145 vocational school students. First, psychological support scale (previous version) was revised into the short version which was constructed 15 items. Second, subjects were divided into three groups (developing group, breakup group, inexperienced group) according to their romantic love experiences. And analysis of variance (ANOVA) was examined on the score of psychological support scale. The results showed that there were no significant differences among three groups and romantic love experiences did not influence a sense of psychologically supported. But the correlation coefficient suggested that the more emotional reactions subjects experienced in the breakup of love the more transpersonal supports they felt. From the depth psychological point of view, the relations with opposite sex is also experience of touch with our own 'inner opposite sex'. It is hard to control the emotions of breakup by our 'ego' function.

It may say that we could touch the transpersonal existence through these experiences.